

カキ「太秋」の果実品質、花芽形成に及ぼす摘心処理の影響

果樹試験場かき・もも研究所

[研究のねらい]

カキ「太秋」は、30cm以上の結果母枝先端芽に雌花が着生する性質があり、その先端芽から発生する新梢を残すせん定になりやすいため、枝が下垂し、枝吊りが必要となる。そこで、樹形のコンパクト化のための新梢摘心処理が果実肥大、品質、花芽形成に及ぼす影響を明らかにする。

[研究の成果]

- ①5月中旬に新梢の葉を基部から8～12葉残して摘心しても、果実肥大に影響しない(図1)。
- ②収穫果実350g以上の割合は、8～12葉摘心で65%程度となり、無摘心より高まる(図2)。
- ③糖度、果肉硬度は、摘心処理による悪影響はなく、1㎡当たり収量も処理間に差がない(表1)。
- ④雌花着生の新梢割合は、いずれの区も23～33%と19年対比1/2程度に減少したが無摘心と差がなく、摘心処理の悪影響はない(表1)。
- ⑤8～12葉摘心により、果実肥大、品質に影響なく、結果母枝の長さを短くできる。

[成果の活用面・留意点]

摘心は10葉程度(新梢基部の小葉は数えない)確保できる5～6月に行う。摘心後に二次伸長する場合はその都度、二次伸長枝の基部で切除する。樹勢の弱い樹には処理しない。

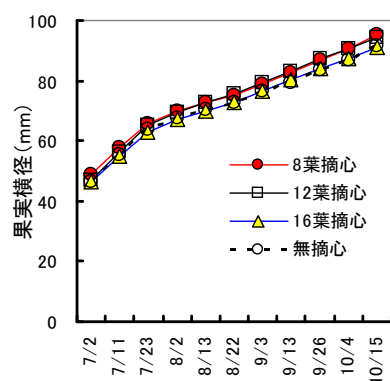


図1 果実肥大の推移

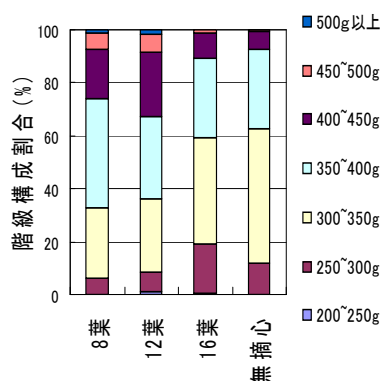
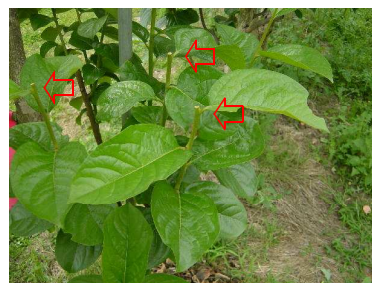


図2 階級構成割合



摘心処理 (矢印)

表1 果実品質、収量および花芽の着生数梢数の割合

区	糖度 (Brix%)	果肉硬度 (kg/cm ²)	1果平均重 (g)	1㎡当収量 (kg)	雌花 (%)		
					H19	H20	H21 (19年対比)
8葉摘心	17.0a	4.5a	372a	10.8a	40.2	17.7	24.8 (62)
12葉摘心	17.0a	4.5a	374a	9.2a	42.0	23.8	23.4 (56)
16葉摘心	17.0a	4.7a	341a	9.3a	60.4	44.4	33.2 (55)
無摘心	17.1a	4.6a	339a	10.2a	60.8	36.8	32.8 (54)

注) Tukeyの多重検定により、同じアルファベット間に5%水準で有意差なし

摘心時期はH19年5月11日、H20年5月12～21日 樹齢：H19年で9年生

(問い合わせ先 TEL : 0736-73-2274)